

白銀の奈落 『残響』

「お前は、死んだはずじゃ!？」

蘇ったその化物は愛しい女の顔をしていた

淫らに男たちを食らう、美しき獣。

そして俺もまた、食われるのだ

【オルガエンジン】シリーズ

女性上位・NTR・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

白銀の奈落

『残響』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

第二部:復讐の宴

1. 港町の亡魂

聖暦2025年6月末。

世界統合連合（U.L.A.）支配下の港町「クロウベイ」。

ここはオーダーの領海に最も近い連合の橋頭堡だ。

空は工廠の黒煙で淀み、海は油と汚物で濁る巨大な掃き溜めである。

大気には錆と安い合成酒、そして人間の欲望が発する酸っぱい匂いがこびりついている。

カイは錆びたフードを目深に被り、雑踏に紛れていた。

彼はオーダーの救助艇から逃亡したのだ。

ルミナス壊滅の混乱に乗じた無許可離隊。

聖女たちの無惨な死も、船の壊滅も、もはや彼の心を縛るものではなかった。

ただ一つ、あの青緑の瞳と最後に聞いた声だけが彼を動かしていた。

『カイ……貴方はやはり、わたくしの『仲間』……』

あの怪物は今や『白銀の奈落』と命名されていた。

それが連合の管轄海域で目撃されたという闇の情報を掴んだカイは、すべてを捨ててこの港町に密入国した。

彼女はなぜ自分を生かしたのか。

なぜ仲間と呼んだのか。

その答えを見つけるためなら、連合の支配地であろうと地獄の底であろうと行くしかなかった。

酒場『ブラックウェーブ』。

連合の末端兵士や旧式のサイボーグ兵、闇商人たちが集う街の腐敗そのもののような場所だ。

湿った埃と体臭の混じる喧騒の中、カイはなけなしの金で手に入れた安酒のグラスを傾けながら、獲物を待つ獣のように耳を澄ませていた。

「聞いたか？ 最近入った『イリス』って女、ヤバいらしいぜ」

「ああ、あの白銀の髪的女か。まるで死んだはずの『白銀の戦乙女』そっくりだ」

「チップ持ちの女なんて戦場のパイロットだけだ。間違いなく訳アリだ……」

兵士たちの下卑た噂話がカイの耳に飛び込んでくる。

（イラストリアス……！）

間違いない。

カイは掴んだ情報と、この噂が一致したことを確信した。

酒場の薄暗い片隅。

「おいイリス、こっちに酒だ！」

「はい……ただいま……っ」

一人の女が給仕として男たちの間を縫っていた。

銀糸を紡いだような髪。

伏せられた瞳は時折客の顔を窺うように上がり、その度に冷たい青い光が揺らめく。

身体のラインが生々しく浮かび上がる安っぽい深紅のドレス。

歩くたびに、豊満な双丘が重たげに揺れた。

客の視線を誘うように深く切り込まれた胸元からは、白磁のような乳房の深い谷間が惜しげもなく晒されている。

彼女はこの酒場で『イリス』と呼ばれていた。

「げへへ、相変わらずたまんねえなこのデカ乳はよォ！」

すれ違いざま、一人のサイボーグ兵が彼女の細い腕を乱暴に引き寄せ、ドレスの胸元へオイルまみれの義手を突っ込んだ。

「ひゃああっ!？」

「安物の布越しでもすげえ弾力だ。ほら、もっとよく見せろよ」

「や、やだっ……やめて、痛い……っ」

か細い声で怯えながら抵抗するが、サイボーグの力から逃れられるはずもない。

周囲の兵士たちも下卑た笑い声を上げながら、彼女の豊満な尻や太ももを遠慮なく撫で回し始めた。

「おいおい、嫌がってる割には、ここの先っぽはギンギンに尖ってきてるじゃねえか」

「ほら、股ぐらも擦り合わせて……すけべな身体しやがってよォ」

「ひぐっ……ちがっ、これは……ああっ……」

涙目で身をすくませる、弱々しい美少女の顔。

しかし、その潤んだ瞳の奥には確かな熱が帯びている。

彼女は息を乱しながら、男たちの蹂躪に耐えきれずに淫らに震えてみせた。

ギリッ、と。カイの奥歯が強く鳴った。

テーブルの下で握りしめた拳が、怒りと屈辱で小刻みに震えている。

下劣な男たちを今すぐ殺してやりたい衝動と、身を隠さねばならないという理性が激しくせめぎ合っていた。

オーダーが殉教として国家葬まで行ったあの気高い筆頭聖女が、こんな薄汚れた場所で、仇敵である連合の兵士たちに肉体を吟味されている。

その汚れた手で、自らの神聖な肉体を弄らせているのだ。

彼女の目的は何か。

連合への復讐のための情報収集か。

それともあの夜カイにしたように、エコーズの本能としての捕食のためか。

カイには分からない。

だが、彼女のその爛れた姿から目が離せなかった。

その夜、イリスは数人の客を取った。

連合の人間兵三人。

そして、腕を重機のように機械化した醜悪なサイボーグ兵二人。

計五人の屈強な男たち。

「五人がかりじゃ、お前みたいな華奢な身体、ぶっ壊れちまうかなァ？」

「こ、こわい……でも……っ、皆さんの言う通りに、しますから……どうか……っ」

彼女は粗野な男たちに囲まれ、ひどく怯えたような甘い吐息を漏らす。

そして弱々しく彼らの腕に縋るようにして、酒場の裏手にある連れ込み宿の薄暗い部屋へと消えていった。

これ以上見ていられず、カイは逃げるように酒場を飛び出した。

夜の冷たい外気と錆びた潮風を肺の底まで吸い込んでも、胸の奥でどす黒く渦巻く嫉妬と苛立ちは決して消えない。

「クソッ……！」

行き場のない怒りに任せ、路地裏の錆びた配管を力任せに殴りつける。

鈍い痛みが走ったが、頭を冷やすことはできなかった。

彼は吐き捨てるように荒い息を吐くと、闇に紛れ、連れ込み宿の窓下へと足音を殺して回り込んだ。

2. 欲望の奈落

窓の隙間から漏れる軋むベッドの音。

男たちの下品な笑い声。

そして女の甘い喘ぎ声。

「ひゃあっ！ あ、ダメ……そんな、乱暴に……！」

「ははっ、いい声だ！ 死んだ『白銀の戦乙女』様を犯してるみたいで最高に興奮するぜ！」

カイは窓下の暗がりに身を潜め、僅かに開いた隙間から覗き見るその光景を、網膜に焼き付けていた。

怒りと屈辱で、掌から血が滲むほど拳を握りしめる。

しかしそれとは裏腹に、彼の下半身は熱く怒張し、痛いほどの硬さを保っていた。

かつて崇拜した気高い筆頭聖女が、下劣な兵士たちの肉欲の捌け口にされている。

その背徳的な事実がカイの脳髓を麻痺させ、男としての本能を否応なく刺激していたのだ。

「んっ……あ……いやぁ……でもっ……」

男が巨根を容赦なく奥底へと打ち込む。

イリスの口から苦痛と快楽の混じり合った嬌声が漏れた。

「だめ、奥、こわれちゃう……なのに、気持ちい……っ」

(まさか、本当に肉欲に溺れているのか……?)

カイは己の目を疑った。

女の秘裂からはたっぷりと愛液が溢れ出し、男の楔を滑らかに受け入れている。

その表情は快楽に蕩けきり、どこからどう見ても無力で従順な娼婦そのものだった。

精神まで連合の拷問に壊され、ただの雌に堕ちてしまったのか。

それとも、すべては罠なのか。

窓の外から見つめるカイには判断がつかない。

「いいぜ、もっと鳴け！ お前みたいな上等な女を犯せるなんて最高だ！」

隊長は自身の支配力に酔いしれ、醜い欲望のままに腰を打ち付ける。

無力な女を好き勝手に蹂躪しているという完全な優越感が、男から一切の警戒心を奪い去っていた。

「ああ、もうダメ……！ 旦那様……っ、おねがい……っ……もっと……もっとお……！」

イリスの甲高い絶頂の叫び。

彼女が完全に快楽に屈したと確信し、男が最奥に熱い精液を吐き出そうとした、その瞬間だった。

「な.....なんだ、この感覚.....！ やべえ、頭が.....！ ぬ、抜けない.....！」

快楽に浸っていた隊長の顔が、唐突に恐怖へと引き攣る。

力任せに腰を引き抜こうとするが、まるで万力で固定されたようにびくともしない。

「ひ、ひい.....っ！？ 中が、中が動いて.....っ！」

(始まった.....！)

窓の隙間から、二人の結合部が微かに見えた。

イリスの秘裂から無数の細い肉の触手が這い出し、隊長の肉棒の根元を外側からびっしりと拘束している。

内部で何が起きているか、カイには痛いほどわかった。

「おい隊長、どうした？」

「急に何ビビってんだよ」



ベッドの周囲で順番を待っていた四人の兵士たちが、訝しげに顔を見合わせ、様子を見ようと一歩近づいた。

「あ.....ぐ.....っ！　おおおっ.....！」

だが、隊長は彼らに答えることもできず白目を剥き、快楽と恐怖の狭間で激しく痙攣し始める。

その凄惨な絶頂の姿に、あの夜、自分が味わわされた絶望がフラッシュバックする。

熱く猛っていた下半身とは裏腹に、カイは無意識のうちに己の最奥をきゅっと強張らせた。

無数の極小吸盤と高周波振動に犯され、強制的にすべてを搾り取られたあの感覚が、身体の芯を焼くように蘇る。

イリスはその男の身体の下で、ゆっくりと上体を起こした。

青緑の瞳はもはや何の感情も映していない。

先程までの甘い媚態は完全に消え失せ、そこにあるのは無防備な獲物を前にした冷徹な捕食者の目だった。

「『お食事』の時間ですわね」

その瞬間、イリスの唇から紡がれた冷たい歌声が、部屋中を満たした。

「なっ……！？ 身体が、動か、ねえ……！？」

「腕の制御系が……ダウンして……っ！ クソッ、言うことを聞け！」

異変に気づいた兵士たちが悲鳴を上げて武器に手を伸ばそうとするが、遅かった。

イリスの歌声が彼らの脳波を直接支配し、その場に縫い付けたのだ。

後ずさろうとした不自然な姿勢のまま、人間兵の肉体が石のように硬直する。

サイボーグ兵の義腕からは、強制ロックされたモーターがギリギリと嫌な軋み音を立てた。

システムエラーと神経ジャックによる完全な凍結。

声すら奪われ、恐怖に見開かれた四人の瞳だけが絶望的に揺れ動いている。

隊長だけが意図的に意識を保たされていた。

イリスの歌声が彼の直接侵食し、体内の触手が肉棒から精液を強制的に搾り上げていく。

「やめろ、頭が……っ、ああっ……！」

男は限界を超えて何度も射精させられ、その顔は極限の苦痛と絶頂の快楽に醜く歪んでいた。

「“彼ら”はわたくしを『モノ（実験体）』にした」

イリスは眼下で絶頂に喘ぐ男を冷酷に見下ろしながら、大きく開いたドレスの背中から、白い肌を割って別の触手を何本も這わせた。

金縛りにあった他の兵士たちの耳孔へと、透明な粘液を纏った触手が這うように伸び、スルスルと脳の奥深くまで侵入していく。

「た、たすけて.....死にたくない.....っ、やめ、やめてくれえっ！」

「ああ.....っ、ああっ.....素晴らしいわ.....っ」

男の無様な命乞いなど、もはや彼女の耳には届いていない。

イリスの口から本物の歓喜の喘ぎが漏れる。

男たちが死の淵で放つ恐怖と絶望の味。

生命力だけでなく、人間としての記憶や知識のすべてが啜り上げられているのだと、急速に空っぽの抜け殻と化していく男たちの姿がカイに直感させた。

兵士たちの身体がビクンと跳ねる。

精液と生命エネルギー、そして人間としての意識さえもが、触手を通じて急速にイリスへと吸い上げられていく。

極上の食事を摂取する圧倒的な快感に、イリスの肉体は幾度も強烈な絶頂を迎えた。

豊満な乳房を震わせ、歓喜のオーガズムに身をよじらせる。

しかし、その青緑の瞳の奥には、決して消えることのない氷のような憎悪が静かに底冷えしていた。

肉体は熱く蕩け、快楽に支配されていても、心は一切彼らを人間として見ていない。

完全に会話の通じない、恐るべき化け物の姿がそこにあった。

「だから.....あなたたちも、わたくしの『糧』になりなさい」

囁くような、酷薄で冷え切った声だった。

身体は快感に激しく打ち震えながらも、彼女は一切の感情を交えず、淡々と男たちの命を貪っていく。

兵士たちの瞳から急速に光が失われていく。

脳神経を焼き切られ、知識も感情も空っぽに抜け落ちた彼らは、ただ呼吸だけを繰り返す生きた屍へと成り果てた。

やがてすべての養分を吸い尽くし終わると、イリスの身体の震えがピタリと止まった。

先程までの熱狂と紅潮が、彼女の表情からふっと消え去る。

どれだけ男たちの命と情報を貪り喰っても、実験室で失われた聖女としての尊厳は決して戻らない――。

彼女の全身から発せられる圧倒的な虚無感が、窓の外のカイにそう確信させた。



その顔は、氷のように冷たい無表情へと戻っていた。

「ただ、それだけのこと」

冷徹な声だけが、血の匂いと精液の悪臭が漂う部屋に響き渡った。

3. 奈落の対峙

惨劇の部屋から、夜霧の立ち込める冷たい路地裏へとイリスが姿を現した。

先程まで獲物を貪っていた恍惚も、氷のような虚無もそこにはない。

その顔には再び、男を狂わせる蠱惑的な娼婦の笑みが張り付いていた。

月明かりが、彼女の足元に転がる空の酒瓶を照らし出す。

乱れた深紅のドレスからは、熱を帯びた白い素肌がなまめかしく覗いていた。

彼女の身体からは、むせ返るような濃密な雄たちの精液の匂いと、微かな血の香りが湿った夜風に乗って漂ってくる。

「カイ」

闇の中に息を潜めていたカイの名を、彼女はひどく優しく、甘く呼んだ。

「.....見ていたのでしょうか？ わたくしの『お食事』を」

カイは震える足で闇から踏み出した。

彼の下半身には、いまだ醜い熱が燻っている。

かつて崇拜し、密かに愛した気高い女性が、下劣な男たちに汚らわしい言葉で喘ぎ、蹂躪される姿。

それを見てあろうことか興奮してしまった己への、凄絶な自己嫌悪と悔しさが、カイの胸を黒く焼き焦がしていた。

「.....なぜだ.....！ イラストリアス.....！」

声が怒りと絶望で無様に掠れた。

愛した女が別の男たちの匂いをたっぷりと纏い、艶やかな笑みを浮かべて目の前に立っている。

その圧倒的な敗北感と背徳感が、カイの理性をぐちゃぐちゃに掻き乱していた。

「なぜ、あんな非道な真似を.....！」

その言葉を聞いた瞬間、イリスの足がびたりと止まった。

彼女は一瞬、カイの言葉が理解できないとばかりに小首を傾げた。

まるで滑稽な冗談を聞かされたか、あるいは言葉の通じない生き物を見ているかのような、純粹に呆気にとられた表情。

やがて、その虚を突かれた顔が、ゆっくりと歪む。

心底可笑しそうに、彼女は肩を震わせてくすくすと笑い始めた。

銀の鈴を転がすようなその声が、カイの偽善的な罪悪感を冷酷に抉っていく。

「.....非道？」

彼女はゆっくりとカイに近づいた。

夜霧よりも冷たく、それでいて焼け焦げるほどに甘い吐息がカイの頬を撫でる。

イリスは深紅のドレスの深いスリットから白磁のような太ももを覗かせると、そこに隠し持っていた一本のサバイバルナイフを抜き放った。

それはかつて、彼女が聖女として最期まで抗おうとした誇りの残骸だ。

彼女は男としての情けない熱を持て余しているカイの手に、強引にその柄を握らせた。

そして冷たい切っ先を、自らの豊満な胸の谷間——心臓の真上へと導く。

「止めたければ、わたくしを殺しなさい、カイ」

「……っ！」

ナイフを握るカイの手が激しく震えた。

切っ先越しに伝わってくる、彼女の柔らかな乳房の感触。

それは生々しいほどに温かく、今しがた別の男たちに貪られていた事実を、容赦なくカイに突きつけてくる。

「なぜ、あんな奴らのために、お前が手を汚すんだ！」

「手を汚す？」

イリスはナイフの切っ先が白い肌に食い込み、一筋の赤い血が胸の谷間を伝い落ちるのも構わず、さらにカイへと密着した。

男たちの体液と混じり合った彼女の匂いが、カイの鼻腔を激しく犯す。

「カイ。貴方はわたくしが墜ちたあの日、連合の実験室で何をされたか知りもしない」

彼女の青緑の瞳が、狂気と憎悪の炎で揺らめいた。

それは娼婦の仮面の下に隠されていた、エコーズとしての絶対的な絶望の色だった。

「あの男たちはわたくしの身体を隅々まで辱め、子宮に薬液を流し込み、尊厳のすべてを解体した。わたくしをただの『モノ』にしたのよ！」

その言葉は、カイが想像し、必死に目を背け続けていた地獄の光景そのものだった。

カイの脳裏に、冷たい手術台の上で絶叫しながら肉体を弄ばれるイラストリアスの姿がフラッシュバックする。

「わたくしはもうイラストリアスではない。あの女は実験室で『モノ』に解体され、最前線で『部品』として廃棄されたわ。今ここにいるのは、エコーズの本能のままに『糧』を貪り、連合に復讐するだけの存在」

彼女はナイフごとカイの手を両手で包み込み、さらに胸の奥へと力を込める。

ツツーッと白い肌を伝い落ちた血が、精液の乾いた深紅のドレスに吸い込まれ、どす黒い染みを作っていく。

「そして、貴方は——わたくしの『ノイズ』に気づきながら、見殺しにした。貴方の『傍観』が、わたくしをここに立たせているのよ、カイ」

「あ……」

カイの全身から力が抜け落ちていく。

そうだ。

彼女を怪物にしたのは連合だけではない。

自分だ。

自分が彼女の悲鳴を聞き逃し、戦うことから逃げたから、彼女は墜ち、捕らわれ、無数の男たちに壊されたのだ。

そして先程も――。

彼女が蹂躪される姿に男としてひそかに興奮し、ただ窓の外から発情して見つめていただけではないか。

自分は、彼女を凌辱したあの兵士たちと何も変わらない。

「さあ、殺しなさい」

イリスがその美しい顔をカイの耳元に寄せ、濡れた唇で甘く囁いた。

「それとも……また、見て見ぬふりをして興奮するのかしら？」

「ぐ……っ！」

致命的な凶星を突かれたカイは、喘ぐように呻いた。

下半身の醜い熱を突きつけられ、ナイフを握りしめたまま、微塵も動くことができない。

彼女を殺すことは自らの罪を認めること。

彼女を生かすことは自らの罪がさらなる惨劇を生むのを、この先も見届けること。

イリスはその絶望と屈辱に歪むカイの顔を満足げに見つめると、ふっと彼の手からナイフを抜き取った。

「.....つまらない方」

嘲笑うかのようにそう呟くと、彼女はくるりと背を向ける。

ドレスの裾を翻し、クロウベイの霧深い闇へと歩み去っていく。

「カイ.....貴方はやはり、わたくしの『仲間』ね.....」

カイはその場に崩れ落ちた。

濡れた石畳に膝をつき、彼女の残り香が漂う空間で、獣のように低く咽び泣く。

自らの傍観と卑小な欲望が彼女の憎しみを育てたと知った今、彼に残された道は一つしかない。

それは、闇へと消えた彼女をこの手で「救う」ための、果てのない地獄を歩むことだった。